

第5回定期総会で、会の財政状況が逼迫していることが議論の対象となり、1年かけて皆で話し合っていくことになりました。それを受けて、事務局会議及び運営委員会で財政状況の改善について検討を重ねてきましたので、今までの議論の概略をお知らせします。

また、皆様も検討してご意見をお寄せください。

・応援団員の拡大について

現在、新規加入者は13人・金額が38,000円に止まっており、拡大に努める必要があります。

・原告の負担について

当初一世帯につき10,000円の負担としていましたが、そのうち一人につき5,000円が印紙代として裁判所に納入され、残りの5,000円がニュースの発行などに使われてきました。ニュースの発行回数が増えるにつれて、

5,000円では資金の残りがなくなってきました。

一方、原告で応援団会費として資金を寄せてくれた人が相当数いること、また、原告のカンパが67万円ほどになっており、裁判遂行を原告として支えるという意味が示されています。

このようなことから原告に適宜カンパのお願いするか、または、一世帯につき毎年会費をお願いする案も考えられますが、規約の制約もあり原告に会費を一律に負担していただくようにするのは問題が多いと考えます。

いずれにしても裁判を戦っていくには、何らかの形で原告の方々に資金の面でも負担をお願いせざるを得ないので、次期総会に向け引き続き検討を重ねていくこととしました。

編集部メモ

■『プラスチックの海』ドキュメンタリー映画を別府ブルーバードで観た。知っている顔がたくさんありました。毎年800万トンのプラゴミが捨てられ、ほぼその全てが海に流れ出し、漂っています。海鳥や魚たち、クジラがその破片を飲み込んでいきます。一羽の海鳥から234個のプラゴミが出てきたことも。



そして、最終的には、私たち人間にも害を及ぼしていると解説。便利さに安住し、地球のいのちを省みない人間の愚かさを明示するととても貴重な映像である。

原発に依存する私たちの「発展」はどこに行くのかを考える上で、このプラゴミ問題にも通底する「持続可能な社会」という「思想」が問われていると痛感。

印象に残ったのは、登場する研究者や実践家には女性が圧倒的に多いということだ。

■『種は誰のもの』という映画と講演会が開催されたが、用事があって参加できなかったが、数日後、観た。



元農水大臣で弁護士の山田正彦さんが、「種子法廃止」の危険性を農家や研究者を訪ね歩いて声を聞き、説きまわり、裁判にまで持ち込んでいく姿を追いかけるドキュメンタリーだ。

敗戦後すぐに、国民の食と農業を守るために「主要農産物種子法」が制定され、国内で営々と守り、改良されてきた農産物の種子を各県段階で管理し農家に供給するというシステムをつくり上げてきた。

その日本の食と農にとって生命線とも言える「種子法」を自民党政権は、わずか10時間の審議で棄ててしまったのだ。いわく「民間の力を使って、さらに良い種子開発とシステムを作るため」。しかし、その実態はアメリカを中心とするグローバル企業がすすめる除草剤と農薬を種子をセットにして世界の農産物市場をコントロール、利益を吸い上げようとする戦略に迎合するものでしかなかった。「このままでは日本の農業は根底から壊される。日本人の食は危険極まりない状態になる」というのが山田正彦さんの問題提起だ。

■『プレートテクトニクス』という話を聞いた。月に一度よれよれのおジイさん数名が集って、世を嘆く会がある。名付けて「変竹林の会」(勝手に付けた)。

この日は、元高校の理科の先生から「プレートテクトニクス」の講義になった。

要約すると、地球の表面は10枚くらいのプレートで作られ、絶えずうごいている。日本列島は4枚のプレートが衝突している唯一の場所で、火山や地震が毎日どこかで起きている原因だ。こんな日本に原発などを作ることなど地学界では非常識の極みと思われる。

「安心・安全」は全くのウソ。「安価」というのもすでに欺瞞だと証明された。とまあ、こんなお話。ものすごくわかりやすく面白い。地学ってすごいと思った。(脇元)

編集後記

編集後記を書けと言われたが、何も思い浮かばない。職場にケガ人が出て、その分の仕事が増え、余裕がない。気がつくと「歩こう、歩こう、私は元気!」という隣のトトロの歌を歌っている。疲れているのに、鼻歌が出るほど機嫌がいいと思われる矛盾。(藤田)